opusdei.org

フィリピン・ボラン ティアの 2 週間

2017年8月2日から14日まで、韓国、台湾、マカオ、そして日本からの計26名の学生や若い社会人がフィリピンで行われたボランティア・ワークキャンプに参加しました。

2017/09/06

日本の学生たちはセイドー文化センター(兵庫県芦屋市)の寮生で、他国の学生はそれぞれの国・地域にある姉妹寮からの参加者でした。行き

先はフィリピンの首都マニラ市と、 セブ島にあるティンドグ村でした。

ボランティアの前半はマニラ市から 始まり、4日間をかけて子ども病院 やスラム街で活動する他、マニラの 旧市街見学や現地の姉妹寮との交流 がありました。子ども病院では、移 植のため臓器提供者待ちのガンや重 病を患っている貧しい患者たちを見 舞い、子供たちにはおもちゃやお菓 子を、そのご家族には食料品を配り ました。ほとんどの子供が寝たきり 状態で、幼児が大半でした。この病 院での経験について神戸大学在学中 の小川春樹君(22)はこう語りまし た。「彼らと過ごした時間はほんの 数時間しかなく、僕たちの訪問は、 彼らにとっても、私たちにとって も、非常に小さなことかもしれませ ん。しかし、僕が確信していること は、不意に思い出した時に暖かい気 持ちになれるだろうということで す。Ⅰ

ビデオ: Part 1 (マニラ、6分26秒)

ビデオ: Part 1 (セブ島、6分2秒)

参加者の宿泊先は、オプス・デイが 精神面・霊的面の指導を担当してい るサマール・スタディ・センターと いう学生寮でした。ワークキャンプ の期間中、寮生数名が観光案内や通 訳をしてくれました。

その後、メトロマニラ(マニラ首都 圏) にあるタギッグ市に位置する貧 者の聖母教会を訪問し、主任司祭の マルク・エマン神父から地域の現状 を説明してもらった上で、参加者た ちが実際に現場に赴きました。この 教会のエリア(小教区)には約7万 人の人が住んでおり、教会は信者た ちの霊的な世話のみならず、様々な 社会活動に取り組んでいます。小教 区内の信者数が多く、日曜日には10 回のごミサが捧げられますが、それ でも教会が人で溢れるということで す。この教会には、若い頃にスペイ

ン首都のマドリードで同じく病人や 貧しい人々の世話をしていたオプ ス・デイ創立者の聖ホセマリア・エ スクリバーの聖遺物が聖堂内に安置 されています。

この地域では多くの人がスラム街で 生活しているため、参加者たちが最 も貧しい地区の一つを選び、数百人 の子供たちのためにゲームや音楽 パーフォマンスを企画しました。子 供一人ひとりには文房具とランチ セットを配った後、少人数グループ に分かれて家庭訪問をしました。各 グループが10軒ほどの家を訪問し、 食料品を届けて人々の生活やニーズ を知る機会となりました。父親たち のほとんどは建設現場や道路清掃の 仕事をしており、3~5畳ほどの限ら れたスペースで生活する大家族が少 なくありませんでした。マカオから 来ていたマルコ・ラリコン君(20) はこれについて次のように語りまし た。「子供たちの笑顔は一生忘れら

れないと思います。というのは、いつも朗らかで歓迎してくれた彼らは、実は私たちには想像できないほどの非常に辛い生活を送っていることが家庭訪問の時に分かったのです。それでも笑顔でした。」

8月6日からのワークキャンプの後半は、参加者が飛行機でセブ島へと移動。セブ市から100キロ離れたティンドグという3千人余りの漁村が目的地でした。ここでは、約500人の生徒が在学しているティンドグ公立幼稚園・小学校で寝泊まりし、1週間のボランティア活動を行いました。

毎日のスケジュールは朝早くから始まりました。参加者たちは鶏が鳴く頃に起床し、希望者は隣りのカトリック被昇天の聖母教会での祈りやごミサにあずかってから朝食を食べます。毎日の食事は近隣の家族が作ってくれました。午前中は2~3人

組で1つの教室を担当して出前授業を行います。内容は算数や英語の他に、参加者の出身国の文化紹介や遊び。日本グループは折り紙を教えて各教室で折り紙コンテストを行いました。また、日本の学校の友人などの間で集めた寄付金で購入したおもちゃを賞品として配りました。

昼食後は作業の時間で、校長先生の 希望により今回の作業は校庭に15平 米のステージ(舞台)建設すること でした。毎日の朝礼や文化祭でした。毎日の朝礼や文化祭では ということです。昨年までに、同校 では2つのワークキャンプが行われ、学校の外壁と門が建てられませい た。フィリピンの真夏の強い日トン た。フィリピンの真夏の強い日トン を浴びながら、鉄筋コンクリートメートで埋めてゆく長時間の肉体労働です。

放課後、校庭で生徒たちとスポーツ したり、様々な遊びをしたりしまし た。そして、希望者は生徒たちに村 を案内してもらい、周辺の最も貧し い家庭を訪問して食料品を届けまし た。微々たるものでしたが、一人残 らず大喜びしてくれました。多くの 村人は漁師ですが、単身赴任でフィ リピン国内外に出稼ぎに行かざるを 得ない人も少なくないようです。

ワークキャンプの期間中はちょう ど、カトリック教会の「聖母の被昇 天」の祭日である8月15日の前だっ たので、被昇天の聖母が保護聖人で あるティンドグ村では、祝日の1週 間前から「聖母のフィエスタ(お祭 り) | が毎晩中央広場で行われまし た。音楽や賑やかな芸術パーフォマ ンスがあり、ワークキャンプ参加者 の何人かは審査員として協力しまし た。この村ではフィリピン人の信仰 心や聖母信心が際立っており、平日 のごミサでも教会の聖堂内に入り切 れないほどの参列者でした。

夜は、シャワーがなかったためバケツで身体を洗い、学校の1つの教室と同校の教員宅の部屋を借り、床で雑魚寝しての毎日でした。雨期でしたから、真夜中は毎日豪雨。

作業が終わり、参加者たちはセブ市 に移り、スグブ・スタディの学生をリーというオプス・交流の大学生たちと交流しての大学生たちと諸島でられて関地した。と対はよりで始まりでもまり、を使してはいる。セブにはのです。と呼ばれる聖なるもり、からないです。と呼ばれる聖なるものです。と呼ばれる聖なるものです。と呼ばれる聖なるものです。と呼ばれる聖なるものです。と呼ばれる聖なるものです。と呼ばれる聖なるものです。と呼ばれる聖なるものです。と呼ばれる聖なるものです。と呼ばれる聖なるものです。と呼ばれる聖なるものです。

ワークキャンプを振り返ってマカオ の高校生のヘンリー・チョイ君 (18) は次のように感想を述べてい ます。「モノがもたらしてくれる幸 せはあまり長持ちしないようで、幸 せというものはある意味単純なものですね。しかし、物質主義社会はそれを理解できないでしょう。」

参加者たちは写真を見て様々な思い出を巡らせながら、マニラやティンドグでの貴重な経験から学べた奉仕けていけるかを考えつつ、それぞれの国に帰ってゆきました。「地上に存在する大きなものはすべて、れての始まりが小さかったことを忘れての出くない」(聖ホセマリア・エスクリバー『道』821)

※セイドー文化センターは一般財団 法人精道教育促進協会によって運営 されている男子学生寮(facebookリ ンク)で、オプス・デイが精神面・ 霊的面の指導を担当しています。国 内外ボランティア・ワークキャンプ や社会福祉活動は、寮生たちが立ち

上げた「VOLO学生社会貢献プロ
ジェクト」(facebookリンク)とい
う団体が毎年企画・実施していま
す。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/borantia-2017-8/ (2025/12/12)